



情報処理学会第87回全国大会

2025年3月13-15日, 立命館大学, 茨木・大阪

ハイブリッド開催

# $n$ vs. the Rest 型2値判別器を用いた ECOCの構成法とその性質

早稲田大学

長岡科学技術大学

電気通信大学

早稲田大学

平澤 茂一

雲居 玄道

八木 秀樹

小林 学

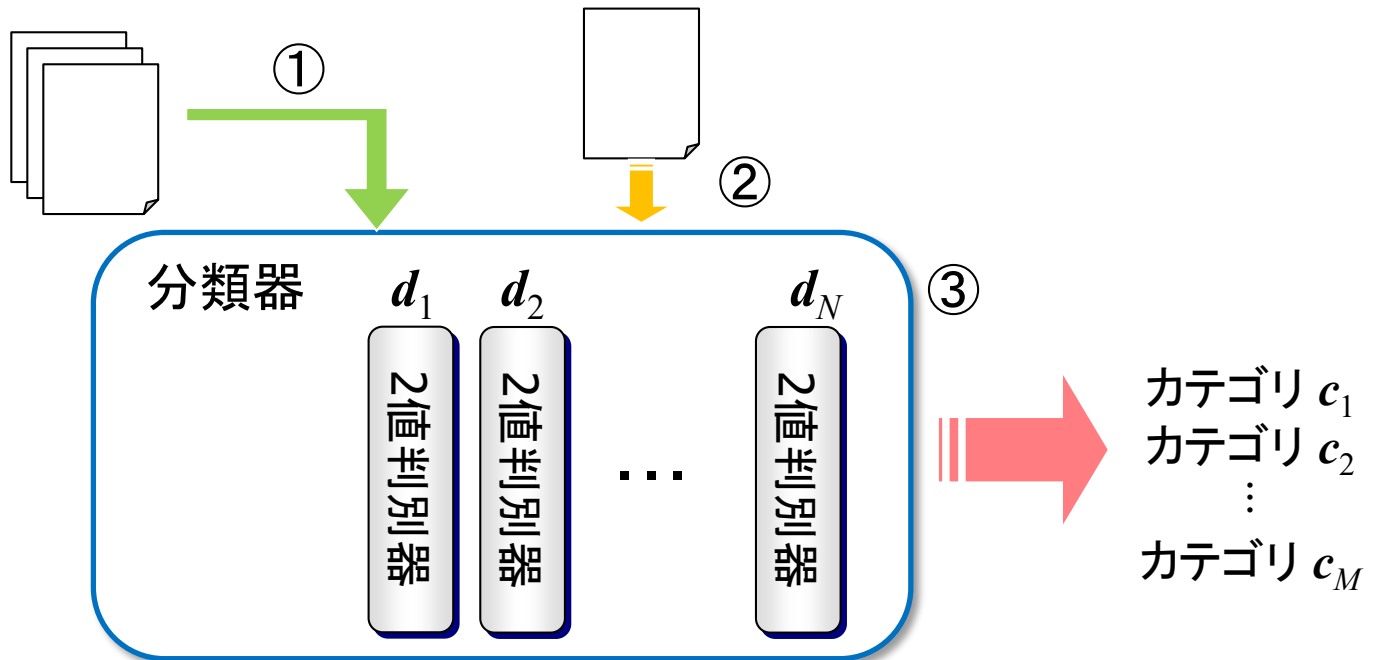
# はじめに

## 多値分類問題 ( $M$ : カテゴリ数)

- 直接的な構成: 決定木、ランダムフォレスト、など
- 2値判別器の組合せ: **Error-Correcting Output Codes (ECOC)**

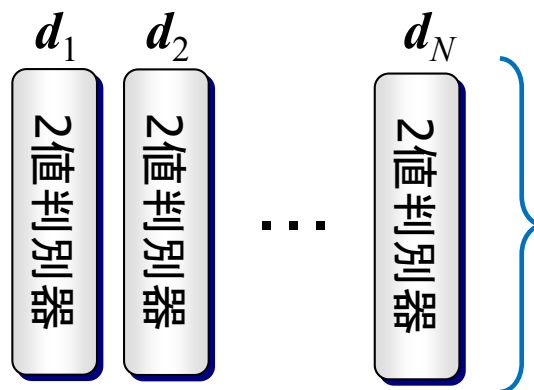
訓練データ(文書集合)  $(x, c_i)^D$

未知データ(文書)  $y$



# ECOCの符号語表

分類器



2値判別器  $d_i$  :

$M$  個のカテゴリを2クラスに分けて  
もってもらしいクラスを判別する

2値判別器において、各カテゴリがどちらのクラス (0または1) として扱われるかを表現する行列を符号語表と呼ぶ。

$$W = [w_{ij}] \in \{0, 1\}^{M \times N}$$

$W$  の例

$M = 4$  {

	$d_1$	$d_2$	$d_3$	$d_4$	$d_5$	$d_6$	$d_7$
$c_1$	0	0	0	0	0	0	0
$c_2$	0	0	0	1	1	1	1
$c_3$	0	1	1	0	0	1	1
$c_4$	1	0	1	0	1	0	1

クラス0 : カテゴリ  $c_1, c_4$   
 クラス1 : カテゴリ  $c_2, c_3$   
 の2値判別器

# 研究目的

- 行ベクトル(符号語)間のハミング距離が大きいと, 分類性能が向上することが経験的に知られている.
- $n$  vs. the Rest ( $nvR$ ) 符号と Exhaustive符号は(ある仮定のもとで) 分類誤り率を最小にする最適な符号である[2] .
- しかし,  $nvR$  符号の距離構造について詳細な解析はされていない.

## 研究の目的と発表内容

- $nvR$  符号の構造を詳細に解析する.
- 特に, 再帰的な構成を示し, 距離構造を明らかにする.
- $nvR$  符号と Exhaustive 符号等の誤り訂正能力を比較する.

[2] G. Kumoi, et al. "Performance evaluation of error-correcting output coding based on noisy and noiseless binary classifiers," *Int. J. Neural Syst.*, vol. 33, no. 2, 2023.

# 符号語表

符号語表  $W = [w_{ij}] \in \{0, 1\}^{M \times N}$

- 第  $i$  行  $c_i = (w_{i1}, w_{i2}, \dots, w_{iN})$  ( $i$  番目のカテゴリ)
- 第  $j$  列  $d_j = (w_{1j}, w_{2j}, \dots, w_{Mj})^T$  ( $j$  番目の2値判別器)

列ベクトル  $d$  に対し,  $\bar{d} = d \oplus 1$  を  $d$  の補元と呼ぶ.

符号語表において,  $d$  と補元  $\bar{d}$  は同じ2値判別器を表す.

	$d_1$	$d_2$	$d_3$	$d_4$	$d_5$	$d_6$	$d_7$
$c_1$	0	0	0	0	0	0	1
$c_2$	0	0	0	1	1	1	0
$c_3$	0	1	1	0	0	1	0
$c_4$	1	0	1	0	1	0	1

同じ2値判別器を表すため, 冗長な表現





## $n$ vR 符号

$M$  個のカテゴリを  $n$  対 ( $M-n$ ) にクラス分けする 2 値判別器を全て並べた符号語表  $W_n^{(M)}$  を,  $n$ vR 符号 と呼ぶ.

[例]  $M = 5, n = 1$  のとき, 1vR 符号の符号語表

$$W_1^{(5)} = \begin{bmatrix} 1, & 0, & 0, & 0, & 0 \\ 0, & 1, & 0, & 0, & 0 \\ 0, & 0, & 1, & 0, & 0 \\ 0, & 0, & 0, & 1, & 0 \\ 0, & 0, & 0, & 0, & 1 \end{bmatrix} = I_5 \quad (I_M: \text{単位行列}).$$

Neural Network の最終層に相当する.

$n \geq 2$  のときは深層学習の拡張につながる [2].

## $n \geq 2$ の場合

$W_n^{(M)}$  :  $M$  個のカテゴリを  $n$  対 ( $M-n$ ) に分類する 2 値判別器の組合せ. 一般に  $n \leq M/2$  を仮定する.

[例2]  $M = 5$ ,  $n = 2$  のとき, 2vR 符号の符号語表

$$W_2^{(5)} = \begin{matrix} & \overset{1^4}{\text{}} & & \overset{0^6}{\text{}} \\ \left[ \begin{array}{cc} \text{1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0} \\ \text{1, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 0, 0} \\ \text{0, 1, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 1, 0} \\ \text{0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 0, 1} \\ \text{0, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 1} \end{array} \right] & . \end{matrix}$$

$W_1^{(4)}$    $W_2^{(4)}$

各列のハミング重みが  $n = 2$  になる.



# $n$ VR 符号の再帰的な構成法

## (1) 構成要素の準備

(a)  $n = 1$  に対して  $\tilde{W}_1^{(M)} := I_M$  (単位行列),

(b)  $2 \leq n < M$  に対して

$$\tilde{W}_n^{(M)} := \begin{bmatrix} 1^{N_1} & 0^{N_2} \\ \tilde{W}_{n-1}^{(M-1)} & \tilde{W}_n^{(M-1)} \end{bmatrix},$$

(c)  $n = M$  に対して  $\tilde{W}_n^{(M)} := 1^M$  (全 1 列ベクトル)  
を定義する.

$$\text{ただし, } N_1 = \binom{M-1}{n-1}, N_2 = \binom{M-1}{n}.$$

## (2) $nvR$ 符号の構成

$nvR$  符号の符号語表  $W_n^{(M)}$  を以下のように構成する.

(a)  $1 \leq n < M/2$  のとき (通常)

$$W_n^{(M)} := \tilde{W}_n^{(M)}.$$

(b)  $n = M/2$  のとき (特別)

$$W_n^{(M)} := \begin{bmatrix} 1^{N_1} \\ \tilde{W}_{n-1}^{(M-1)} \end{bmatrix}.$$

[例3]  $M = 6, n = 2$  (通常) のとき,  $2vR$  符号の符号語表

$$W_2^{(6)} = \tilde{W}_2^{(6)} = \begin{bmatrix} 1^{N_1} & 0^{N_2} \\ \tilde{W}_1^{(5)} & \tilde{W}_2^{(5)} \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} 1, 1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0 \\ 1, 0, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0 \\ 0, 1, 0, 0, 0, 1, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0 \\ 0, 0, 1, 0, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 1, 0, 0 \\ 0, 0, 0, 1, 0, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 0, 1, 0 \\ 0, 0, 0, 0, 1, 0, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 1, 0 \end{bmatrix}.$$

2 項係数のよく知られた漸化式  $\binom{m}{k} = \binom{m-1}{k-1} + \binom{m-1}{k}$  を構成に利用している.

再帰的な構成が符号語間の距離の解析につながる.

[例4]  $M = 6$ ,  $n = M/2 = 3$  (特別) , 3vR 符号の符号語表

$$\tilde{W}_3^{(6)} = \begin{bmatrix} 1^{N_1} & 0^{N_2} \\ \tilde{W}_2^{(5)} & \tilde{W}_3^{(5)} \end{bmatrix}$$

補元の関係！

各2値判別器が2回使用される冗長な表現

$$= \begin{bmatrix} 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0 \\ 1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0 \\ 1, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 0, 0, 1, 1, 1, 0 \\ 0, 1, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 1, 0, 1, 0, 0, 1, 1, 0, 1, 1, 0, 1, 1 \\ 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 0, 1, 0, 1, 0, 1, 0, 1, 1, 0, 1, 1, 1 \\ 0, 0, 0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 1, 0, 1, 1, 1, 1 \end{bmatrix}.$$

$n = M/2$  のときは、左半分を  $W_n^{(M)}$  とおく構成にする

⇒ 符号語間の距離関係も例外的になる

## $nvR$ 符号の符号パラメータの解析

[定理 1] ( $nvR$  符号の符号パラメータ)

$nvR$  符号の符号パラメータは次式で与えられる.

$$\text{符号長} \quad N = \begin{cases} \binom{M}{n}, & n \neq M/2; \\ \binom{M}{n} / 2, & n = M/2, \end{cases} \quad (5)$$

$$\text{情報記号数} \quad K = \log_2 M, \quad (6)$$

$$\text{最小距離} \quad D = \begin{cases} 2 \binom{M-2}{n-1}, & n \neq M/2; \\ \binom{M-2}{n-1}, & n = M/2. \end{cases} \quad (7)$$

[系 3]  $nvR$  符号は等距離符号 (Equidistant codes) である。  
また、そのハミング距離は最小距離  $D$  に等しい。

(証明) 2つの系列  $a, b$  のハミング距離を  $d_H(a, b)$  で示す。  
以降では、帰納法により題意を示す。

$M = 3, n = 2$  のとき、式 (4) の  $W_2^{(3)}$  から 3つの符号語は等距離で最小距離 2 に等しい。すなわち  $c_i, c_{i'} \in W_2^{(3)}$  ( $i \neq i'$ ) について次式が成り立つ。

$$d_H(c_i, c_{i'}) = 2 \binom{M-2}{n-1} = 2 \binom{1}{1} = 2.$$

次に、式 (2) で  $W_{n-1}^{(M-1)}$ ,  $W_n^{(M-1)}$  が共に等距離符号であるとし、 $W_n^{(M)}$  が等距離符号であることを導く。

### 系3の証明 (つづき)

$1^{N_1}$  と  $W_{n-1}^{(M-1)}$  の任意の符号語との最小距離は  $\binom{M-2}{n-1}$  である．同様にして、 $0^{N-N_1}$  と  $W_n^{(M-1)}$  の任意の符号語との最小距離も  $\binom{M-2}{n-1}$  である．合わせて  $\binom{M-2}{n-1} + \binom{M-2}{n-1} = 2\binom{M-2}{n-1}$  となる．

一方、 $W_{n-1}^{(M-1)}$  と  $W_n^{(M-1)}$  の接続による符号の最小距離は両者の最小距離の和であるから  $2\binom{M-3}{n-2} + 2\binom{M-3}{n-1} = 2\binom{M-2}{n-1}$  となり  $W_n^{(M)}$  は最小距離  $D = 2\binom{M-2}{n-1}$  に等しい等距離符号を与える．

$n = M/2$  の場合は、 $W_n^{(M)}$  の左前半部が残り、最小距離  $D = \binom{M-2}{n-1}$  となるが、やはり等距離符号を与える．

[系 4]  $nvR$  符号は  $n \neq M/2$  のとき、**重み一定符号**であり、その重みは  $\binom{M-2}{n-2} + \binom{M-2}{n-1}$  で与えられる。

(証明) 長さ  $n$  の符号語  $a$  の重みを  $w(a)$  で表す。

$W_2^{(3)}$  に対し、各  $i = 1, 2, \dots, M$  について次式が成り立つ。

$$\begin{aligned} w(\mathbf{c}_i) &= \binom{M-2}{n-2} + \binom{M-2}{n-1} \\ &= \binom{1}{0} + \binom{1}{1} = 1 + 1 = 2. \end{aligned}$$

次に、式 (2),(3) で  $W_{n-1}^{(M-1)}$ ,  $W_n^{(M-1)}$  が共に重み一定符号であるとし、 $M$  が偶数の場合  $W_n^{(M)}$  が重み一定符号となることを導く。



## 系4の証明 (つづき)

ここで,  $w(1^{N_1}) = N_1 = \binom{M-1}{n-1}$ ,

一方, 符号語表  $W_{n-1}^{(M-1)}, W_{n-1}^{(M)}$  のそれぞれの符号重みは  $\binom{M-2}{n-2}, \binom{M-2}{n-1}$  で与えられ, 両者の接続による重みはその和で与えられるから, 各  $i = 1, 2, \dots, M$  について

$$\begin{aligned} w(\mathbf{c}_i) &= \min \left[ \binom{M-1}{n-1}, \binom{M-2}{n-2} + \binom{M-2}{n-1} \right] \\ &= \binom{M-2}{n-2} + \binom{M-2}{n-1}. \end{aligned}$$

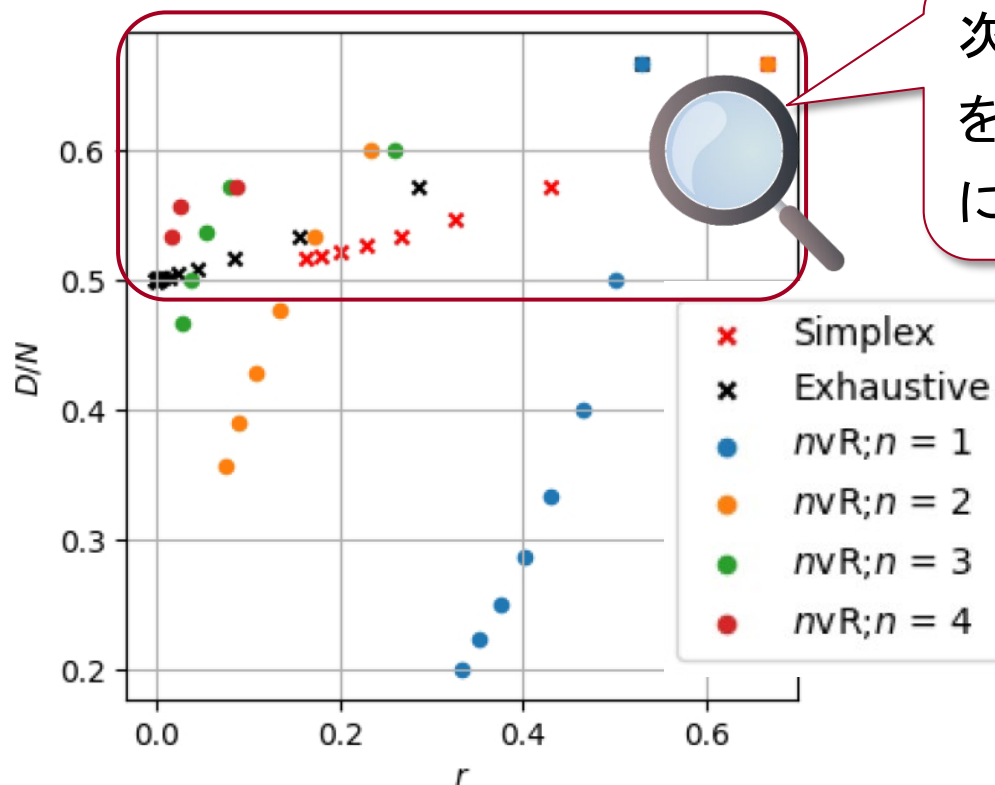
となり, 重み一定符号を与える.

# nvR符号の性能の比較

$$\left( r := \frac{\log_2 M}{N} \right)$$

(1) nvR符号, Simplex符号, Hadamard符号, Exhaustive符号の  
符号化率  $r$  に対する最小距離と符号長の比  $D/N$  を比較

良  
↑  
誤り訂正能力  
↓  
悪



次ページでこの辺  
をいくつかの符号  
に限定して掲載

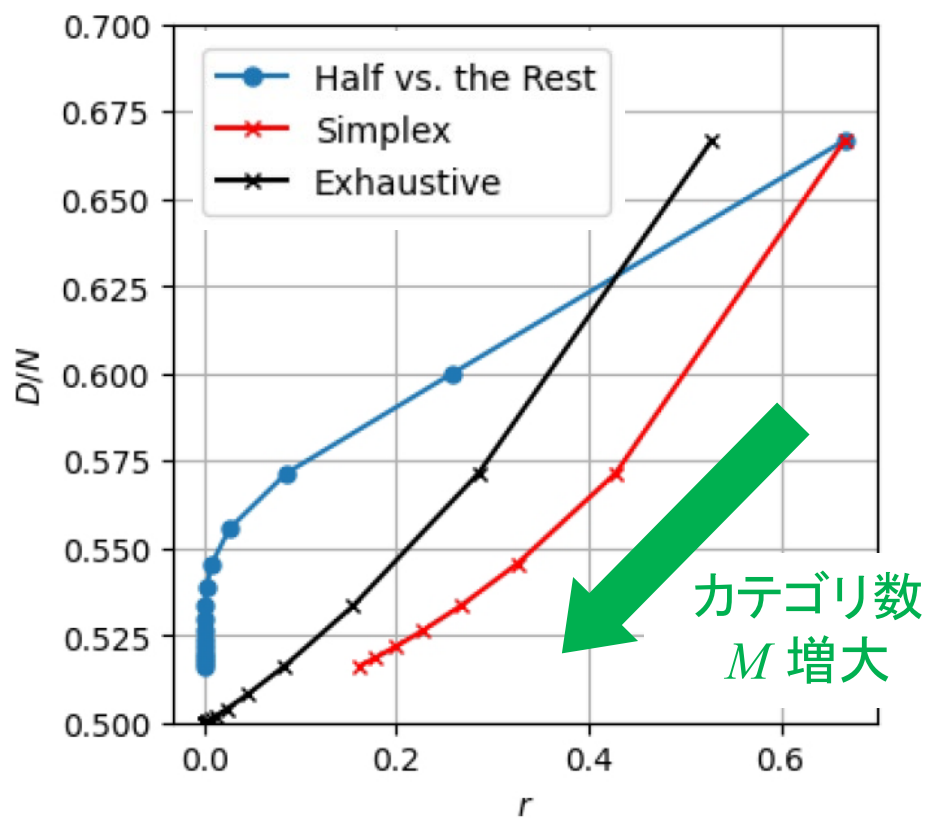
悪 ← 効率性 → 良

(2) Half vs. the Rest符号 ( $n = M/2$  の nvR符号), Simplex符号, Exhaustive符号について, 図1の  $D/N = 0.5 \sim 0.7$  を拡大した図

誤り訂正能力が高い符号

- $M$  が小さいとき: Exhaustive符号
- $M$  が大きいとき: nvR符号 ( $n = M/2$ )

ただし,  $M$  の増大とともに符号化率(効率性)が下がる



## 考察

- (1) 図 1・図 2 より,  $n_{\text{vR}}$  符号は与えられた  $n$  に対し訂正能力  $D/N$  が  $n = \lfloor M/2 \rfloor$  の近辺, すなわち Half vs. the Rest 符号で最大値を取ることが分かる.  
 $r$  は小となるが,  $n_{\text{vR}}$  符号の適用領域はこの辺にある.
- (2) 漸近的な符号の訂正能力は, 次式で与える漸近的距離比  $\delta(r)$  で論じることが多い. Exhaustive 符号のそれは

$$\delta(r) \equiv \lim_{N \rightarrow \infty} D/N = 1/2$$

となり,  $r > 0$  で  $1/2 + 0$  となる数少ない符号である.

## 多値分類問題への適用：人工データによる結果

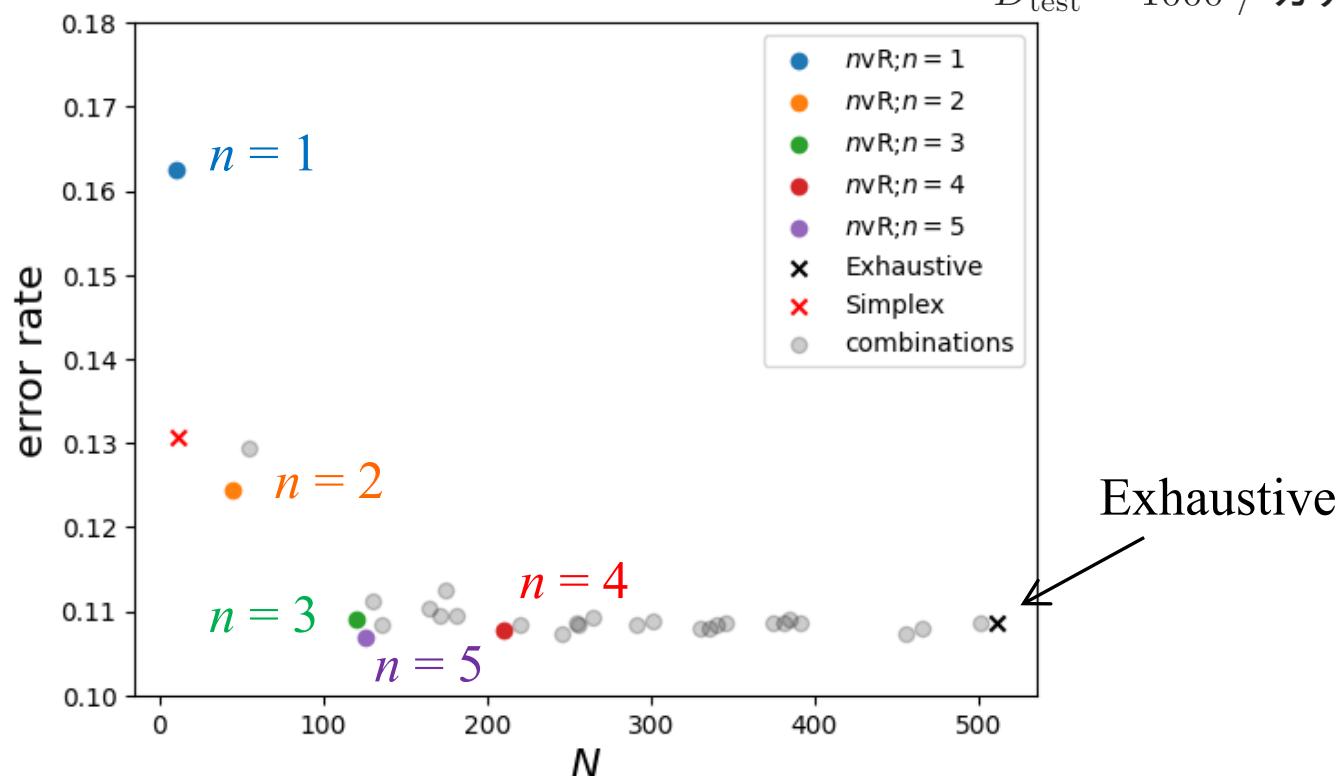
- 各カテゴリの平均ベクトルから正規乱数によりデータを生成
- 2値判別器はロジスティック回帰を使用

データセット：

$D_{\text{train}} = 10$  / カテゴリ

$D_{\text{test}} = 1000$  / カテゴリ

$M = 10$



$n$  を大きくすると誤り率が下がる.  $n = 3$  以降はほぼ同じ性能

## まとめと今後の課題

- $nvR$  符号の再帰的な構成を示し, 行ベクトル(符号語)間のハミング距離が一定(等距離符号)になることを示した.
- $nvR$  符号を接続すると Exhaustive 符号が得られるため, Exhaustive 符号も等距離符号になる.
- 距離と符号長の比  $D/N$  を比較すると,  $N$  (すなわち  $M$ ) が大きいとき  $n = M/2$  の  $nvR$  符号が最も良い.
- 様々な符号との比較は今後の課題である.

## 参考文献

- [1] T. G. Dietterich, and G. Bakiri, “Solving multiclass learning problems via error-correcting output codes,” *Journal of artificial intelligence research*, vol. 2, pp. 263–286, 1994.
- [2] G. Kumoi, H. Yagi, M. Kobayashi, M. Goto, and S. Hirasawa, “Performance evaluation of error-correcting output coding based on noisy and noiseless binary classifiers,” *International Journal of Neural Systems*, vol. 33, no. 02, p. 2350004, 2023.
- [3] 平澤茂一, 雲居玄道, 八木秀樹, 小林学, 後藤正幸, 稲積宏誠, “構成的符号化を用いた ECOC の一構成法 (続)”, 第 84 回全国大会講演論文集, vol. 2022, no. 1, pp. 161–162, 2022.
- [4] H.-Y. Lin, S. M. Moser, and P.-N. Chen, “Weak flip codes and their optimality on the binary erasure channel,” *IEEE Transactions on Information Theory*, vol. 64, no. 7, pp. 5191–5218, 2018.
- [5] G. James, and T. Hastie, “The error coding method and picts,” *Journal of Computational and Graphical Statistics*, vol. 7, no. 3, pp. 377–387, 1998.



ご清聴ありがとうございました



## 目次

- 1 はじめに
- 2 ECOCの符号語表
- 3  $n$ VR符号の構成と性能の解析
- 4 他の符号との比較
- 5 考察
- 6 むすび

---

平澤茂一, 雲居玄道, 八木秀樹, 小林学, “構成的符号化を用いた ECOC の一構成法(続), 情報処理学会第84回全国大会, A4-03, 愛媛, 2022年3月2~5日から続く

[系 3]  $n$ vR 符号は等距離符号 (Equidistant codes) である.  
また, そのハミング距離は最小距離  $D$  に等しい.

(証明) 2つの系列  $a, b$  のハミング距離を  $d_H(a, b)$  で示す.  
以降では, 帰納法により題意を示す.

符号語表の再帰的な構造を利用した,  
数学的帰納法で証明できる

次に, 式 (2) で  $W_{n-1}^{(M-1)}$ ,  $W_n^{(M-1)}$  が共に等距離符号であるとし,  $W_n^{(M)}$  が等距離符号であることを導く.